

# 複数の SNS アカウント利用時における意図しない個人特定に関する要因分析

田崎 洋祐<sup>†1</sup> 稲葉 緑<sup>†1</sup>

**概要:** SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)はコミュニケーションの手段として利便性を提供する一方で、投稿内容によっては意図しない人物から個人特定がなされるなど、プライバシーが脅かされる可能性がある。本研究では、複数の SNS アカウント利用時における意図しない個人特定の要因を探索することを目的とした。はじめに、複数の SNS アカウント利用時における意図しない個人特定の事例 4 件を分析した。結果、人気希求、自己表出性、尊大なナルシズム、自尊心、自己情報を公開する範囲が特に着目される要因であった。これらの要因に着目し、また、より多くのデータを収集することを目的にウェブ調査を実施した。調査の結果、人気希求と自己表出性、自尊心は意図しない個人特定の経験との関連性が確認され、学生や女性が影響を受けやすい傾向にあることが明らかとなった。

**キーワード:** SNS, 自己情報公開, 個人特定

## Factor analysis of unintended individual identification when using multiple SNS accounts

YOSUKE TAZAKI<sup>†1</sup> MIDORI INABA<sup>†1</sup>

**Abstract:** While social networking services (SNS) provide convenience as a means of communication, privacy may be threatened depending on the content of the posting. The purpose of this study is to find out factors of the unintended individual identification in the case of using multiple SNS accounts. First, we analyzed the factors using actual incidents concerning the unintended identification. As a result, need for popularity, self-expression, self-expression, grandiose narcissism, self-esteem, and the range of self-disclosure were factors to be focused in particular. Subsequently, we performed a Web research. A result showed that of experiences of the unintended individual identification related with and need for popularity, self-expression, and self-esteem. In addition, students and women tended to be subject to the unintended identification.

**Keywords:** SNS, Self-disclosure, Individual identification

### 1. はじめに

SNS は今日の我々の生活において、コミュニケーションの手段として利便性を提供している。総務省が発表した平成 29 年度の情報通信白書[1]によれば、SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)は LINE, Facebook, Twitter などのサービスが代表的なものとして挙げられている。本発表では、これらの分類に基づいて進めるものとする。

近年、SNS の利用者は増加し続けている。総務省が行った、10~60 代の合計 1500 名の代表的 SNS の利用に関する

調査によれば 2016 年時点で、幅広い年代層の約 7 割がなにかしらの SNS を利用しているとしている[1]。

また、青山が 2016 年に行った調査では、大学生の 9 割以上が 2 つ以上の SNS を利用し、Twitter 利用者の半数以上が複数の SNS アカウントを所持するなど、利用目的に応じて SNS サービスやアカウントを使い分けているという実態が明らかにされている[2]。

SNS は、家族や友人といった身近な人々との連絡ツールとして、あるいは未知の人々との意見交換などの場として機能しているが、個人的な情報の公開の仕方によっては

トラブルに巻き込まれるということが懸念される。

総務省が青少年向けの情報教育用の資料として公開している、インターネットトラブル事例集[3]においても、「意図しない相手に対する自己情報の公開」や「個人特定に結びつく投稿内容」に対して、注意を促す内容が記載されている。

総務省が注意を促しているように、実際に SNS 上の投稿がもとで個人特定されたり自身が意図していなかった相手にまで情報が公開されたりして、実生活に被害が及んでしまった事例が存在しており、今後の発生を防ぐための対策が必要である。そこで、本研究では、意図しない個人特定を防ぐための対策として、自己情報の公開に着目する。

## 2. 先行研究と研究の目的

### 2.1 先行研究

自己情報の公開とプライバシー意識に関する先行研究として、「自己情報公開と心的要因に関する研究」と「複数のアカウント利用時における個人特定に関する研究」の2種類が挙げられる。

自己情報公開と心的要因に関する研究について、3本の先行研究を取り上げる。

太幡らは、自己情報公開を統制しようとする程度を表す、情報プライバシーを1. 自伝的情報(悩み事など)、2. 属性情報(性別など)、3. 識別情報(本名など)、4. 暗証情報(クレジットカードの番号など)の4つの情報次元で測定する、インターネット版プライバシー次元尺度 (Multi-dimensional Privacy Scale for Internet users : MPS-I) [4]を作成している。

また、MPS-Iを利用して、自己情報公開を規定する心的要因として、情報プライバシーと人気希求、犯罪被害リスク認知の3つを検討した[5]。その結果、属性情報や識別情報への情報プライバシーが低いほど、不特定他者への自己情報公開数が多く、また、自己表出性が高かった。自己表出性とは、公開内容に自己に関する事柄を含めている程度のことを指す。人気希求については弱いながらも自己情報公開を規定しているとする結果が得られたが、不特定多数に対する自己情報公開数に関しては有意ではなかった。罪被害リスク認知については、著者らの予想に反して、リスクへの認知度が高いほど自己情報公開がやや高まるという結果となった。

Ahnらはナルシズムと自己情報公開について考える上で、尊大な(grandiose)ナルシズムと脆弱な(vulnerable)ナルシズムの2次元構造で考える必要性を提唱した[6]。尊大なナルシズムとは「社交性、外向性、および誇大表現に関連する性質であるもの」、脆弱なナルシズムとは「過敏症、脆弱性、防御性、および不安に関連する性質であるもの」としている。調査の結果、脆弱なナルシズムはプラ

イバシーを制御しようとする行動意図が見られたのに対し、尊大なナルシズムでは有意でなかったことを明らかにしている。

複数のアカウント利用時における個人特定に関する研究は少数ながら先例が存在している。

吉國らは、「攻撃者が利用者の既知の SNS アカウントから別の SNS アカウントを見つけ出す可能性を表す指標」であるアカウント到達可能性を定義し、その算出モデルを提案した。その中で、友人やフォロー関係は個人特定につながる要素であるとしている。2014年の研究[7]においては、あるユーザが Twitter 上でフォローしているアカウント群の投稿内容を基にユーザの興味の対象の推測し、アカウント到達可能性の算出を試みている。結果としてその推測精度は低かった。

### 2.2 研究の目的

前節で取り上げた先行研究調査において、単一アカウントに関する先行研究で得られた知見が複数の SNS アカウント利用時にもそのまま利用できるかが現状では不明である。

また、複数の SNS などの利用する前提で、自己情報公開と心的要因を扱う研究は非常に少ない。

そこで、先行研究で得られた知見をベースにしつつ、新たな調査によって、複数の SNS アカウント利用時における意図しない個人特定の要因を探索することを本研究の目的とする。

## 3. 先行研究および事例に基づく意図しない個人特定の要因

単一アカウントの個人特定問題に関する先行研究で提案された要因が、実際に発生した意図しない個人特定の事例にどれだけ当てはまるかを評価する。

先行研究で提案された個人特定を助長する要因は「心的要因」と「属性・状況要因」に大別された。心的要因は人間の行動の動機として、意図しない個人特定を助長するものである。属性・状況要因は、上のような人間の行動の動機を喚起し得るものである。これらが影響し合って、意図しない個人特定がなされる事象が誘発されると本研究では想定した。

### 3.1 先行研究に基づく要因の検討

本節では先行研究において提案された要因を示す。これらの要因のうち、単一アカウントにおける事象にのみ当て余る要因は除外した。個人特定の要因となりうるものを心的要因、属性・状況要因に分類し、列挙する。

#### 3.1.1 心的要因

(ア) 人気希求[5]: 自分にとって重要な集団の人たちから人気を得たいと思うことである。

- (イ) 犯罪被害リスク認知[5]: 犯罪に遭うことに対するリスク認知である。
- (ウ) 自己表出性[5]: 公開内容に自己に関する事柄を含めている程度である。
- (エ) 尊大なナルシズム[6]: 社交性, 外向性, および尊大さの直接表現に関連する形質, 「明確なナルシズム」, 注目され称賛されることが当然という態度である。
- (オ) 脆弱なナルシズム[6]: 過敏症, 脆弱性, 防御性, および不安によって特徴付けられる, 「隠密なナルシズム」, 注目され労わってもらえることが当然という態度, 他者からの拒絶に敏感である。
- (カ) 自尊心[6]: 一般的には, 自分自身に対する賞賛, 価値, 承認, または好きになる程度. 社会科学においては, 自分自身または人格の顕著な属性にわたる評価の合計として定量化される仮説的構成概念. 自分の絶対的価値, 相対的価値, または重要性の総合的な感情評価である (Blascovich & Tomaka, 1991)[15] .
- (キ) コンピュータ不安[6]: 情報集約的環境下において, コンピュータ技術に対して強い懸念を持つ個人が感じる不安である。

### 3.1.2 属性・状況要因

- (ク) 年齢[5]: 年齢が低いほど個人特定につながりやすい。
  - (ケ) 性別[5]: 男性のほうが個人特定につながりやすい。
  - (コ) コミュニティ数[5]: 所属しているコミュニティが多いほど個人特定につながりやすい。本研究では, 次の2点を考慮するものとする。
    1. 単一のアカウントがどれだけのコミュニティに参加しているか, だけではなく目的別のアカウントをいくつ持っているかについても対象とする。
    2. アカウントの平均所持数は4~5とする。根拠は次のとおりである。
- ① アライドアーキテクツ[8]によれば, 継続利用している SNS は Facebook・Twitter・Instagram・LINE の4種で顕著であり, それ以外の継続利用率は半分以下であることから, アカウントの平均所持数に影響を及ぼしているのは, これら4大 SNS と仮定する。ただし, YouTube はここでは, 動画視聴サイトと扱うこととする。
  - ② アライドアーキテクツ[8]によれば複数の SNS アカウントを利用しているユーザは, 4大 SNSのうち3~4種利用している層が75%ほどを占めていることから, 3~4種類の SNS を利用していると推測される。
  - ③ 電通[9]によれば, Twitter に関しては平均して2~3個のアカウントを利用している。

- ④ LINE や Instagram, Facebook は基本として1人につき1つのアカウントしか所持できない。
- (サ) フォロー・友人関係[7]: フォローしているユーザや友人関係にあるユーザが公開している内容から人物像をプロフィールできる。

### 3.2 意図しない個人特定の事例分析

実際に発生した意図しない個人特定の事例を用い, 前章で挙げた要因を評価した。そのことで, 複数の SNS アカウント利用時における意図しない個人特定の要因のうち, 特に注目すべきものを明らかにすることを目指した。

事例は次の要件を満たすものを探し, 選定した。

- A) 関連書籍 (荻上, 2007 ; 小林, 2011) [10][11]で言及されている。
- B) Google 検索による検索でヒットした WEB ページの内, 次の要件を満たしている。
  - (ア) ニュースサイトに掲載されている。
  - (イ) ネットメディアの記事で執筆者の名前が記されている。
  - (ウ) 事件の経緯を被害者本人の投稿のアーカイブと共に記している。

選定の結果, 4件の事例を収集した。表1に各事例の概要表と詳細を示す。

事例の分析にあたっては, 3.1で示した各要因のほか, 属性・状況要因については次の4要因を追加した。その理由は, 事例を概観したところ, 単一アカウントに関する先行研究において提案されていないものの意図しない個人特定に関連する要因である可能性があるかと判断されたためである。

- (シ) 自己情報を公開する範囲: 問題点は自己情報公開そのものではなく, 自己情報公開をする相手が適切に設定されていないことである。
- (ス) プロフィール文やアイコン画像, 言葉遣いの使いまわし: 複数のアカウント間の関連性を判断する有力な情報となりうる。
- (セ) 脆弱なユーザ ID やハンドルネーム: 問題点は自身の名前や生年月日, 所属先などの自己情報を利用することである。
- (ソ) 他のユーザからの自己情報の公開の放置: 自己情報公開による特定要因ではないものの, 自己情報を管理するという観点において重要である。

以上から, 評価する特定要因は心的要因が7項目, 属性・状況要因が8項目となった。

### 3.3 評価の方法と結果

表2にここまで検討した要因を実際に発生した個人特定の事例に照らし合わせて評価したものを示す。評価の基

表 1 複数のアカウントにおける意図しない個人特定

事例名	発生年	性別	属性	媒体	きっかけ	特定要因	個人特定されたことによる影響	補足
アルバイト	2011	女性	大学生	Twitter, mixi, Facebook	アルバイト先に来店していた有名人に課する情報を暴露	実名を基にしたID, 所属するmixiコミュニティ, Twitter上での繋がり, 画像投稿, 過去の投稿内容, 急な投稿削除	アルバイト先への通報・処分	
2ch高校生	2012	男性	高校生	Twitter, mixi, 2ちゃんねる	2ちゃんねる上で他の利用者を挑発したり、場違いな投稿を繰り返す	大学の合格通知書の画像投稿, 所属校関連のスレッドへの書き込み, 過去の投稿内容, SNS上に2ちゃんねるユーザと分かる書き込み	自動車や墓石などの所有物に対するいやがらせ, 担当弁護士に対するいやがらせ, 肖像権の侵害	Google検索「八神 2ch 個人特定」
コンビニ土下座	2014	男女4名	20~40代	Twitter, 動画サイト, Facebook	コンビニ内での態度をめぐり店員と口論となり、4人に対して店長が土下座して謝罪している様子を動画投稿	TwitterやFacebookにプライベートな内容	恐喝容疑で逮捕	Google検索「コンビニ土下座 特定」
活動家男性	2015	男性	会社員	Twitter, Klout.com, Facebook, LinkedIn	政治信条上で対立している人物らの個人情報をFacebookから収集し、リストを公開	過去のやり取りに本名, Klout.comにTwitterと同じ自己紹介, Klout.comに英表記の本名, Facebook等に職業・職種・学歴, Facebook等に画像投稿	失職, 所属企業の信用失墜, 商品への悪評	Google検索「闇のあざらし 個人特定」

準は次のとおりである。

- A) 性別: 0,1 の 2 段階で評価する。男性のほうが個人特定につながりやすい。  
 (ア) 男性: 1  
 (イ) 女性: 0
- B) 年齢: 0~2 の 3 段階で評価する。年齢が低いほど個人特定につながりやすい。  
 (ア) 10代: 2  
 (イ) 20代: 1  
 (ウ) 30代以上: 0
- C) コミュニティ数: 0~2 の 3 段階で評価する。所属しているコミュニティ数が多いほど個人特定につながりやすい。ここではアカウントの所持数で評価し、平均アカウント所持数は4~5とする。  
 (ア) 6個以上: 2  
 (イ) 4,5個: 1  
 (ウ) 2,3個: 0
- D) 上記以外の項目: 0~3 の 4 段階で評価する。  
 (ア) 明確に該当している: 3  
 (イ) 明言できないが該当すると推測される: 2  
 (ウ) 該当しないと考えられるが、明確に否定できない点が存在する: 1  
 (エ) 明確に該当していない: 0

実際に発生した個人特定の事例を分析した結果、特に個人特定を助長する要因として、心的要因では人気希求や自己表出性、尊大なナルシズム、自尊心が、属性・状況要因では自己情報を公開する範囲が挙げられた。次の調査ではこれらの要因に特に着目することとした。

表 2 検討した要因の評価表

要因カテゴリ	項目名	意図しない個人特定の事例				合計
		アルバイト	2ch高校生	コンビニ土下座	活動家男性	
心的要因	人気希求	2	3	3	2	10
	犯罪被害リスク認知	1	2	0	2	5
	自己表出性	2	3	1	3	9
	尊大なナルシズム	1	2	2	3	8
	脆弱なナルシズム	0	1	0	0	1
	自尊心	1	2	2	3	8
	コンピュータ不安	1	2	0	0	3
属性・状況要因	年齢	1	2	2	0	5
	性別	0	1	0	1	2
	コミュニティ数	1	2	1	1	5
	フォロー・友人関係	3	0	0	1	4
	自己情報を公開する範囲	3	3	3	3	12
	プロフィール文やアイコン画像, 言葉遣いの使いまわし	0	3	0	3	6
	脆弱なユーザIDやハンドルネーム	3	0	0	0	3
他のユーザからの自己情報の公開の放置	0	0	0	3	3	

## 4. 調査

### 4.1 調査の目的・概要

前章で検討した要因と意図しない個人特定の経験に関するオンライン調査を実施した。その理由として、事例分析において採用されたサンプルが4件と少なく、得られた結果の信頼性に欠けると判断されたためである。そこで、より多くのデータを収集し、意図しない個人特定の要因を検証することを目的とする。

### 4.2 調査の方法

調査は調査会社を介したウェブ調査を実施した。調査期間は2019年12月3日から2019年12月6日であった。調査対象は現在2種類以上のSNSを利用している、15歳から29歳の男女とした。600名分の回答を回収し、同一の選択肢を選択する傾向にあるものや後述する建前尺度の項目

に対して明らかに不整合な回答をしているものは除外した。その結果、305名分の有効回答を得た。回答の内訳は男性139名、女性166名、学生152名(男性74名、女性78名)、社会人153名(男性65名、女性88名)であった。

調査に使う質問項目は、心的要因及び属性・状況要因、そして個人特定経験に関するものに大別される。

はじめに、心的要因に関する質問項目を示す。各要因および質問項目は次のとおりである。

#### A) Big Five Personality[12]

回答者の基本的なパーソナリティ特性を把握するうえで、一般的に用いられる指標として採用した。

#### B) 人気希求[13]

#### C) 自己表出性[5]

#### D) 尊大なナルシズム[14]

#### E) 自尊心[15]

これらは、3.3で特に着目するとしたため、採用した。

#### F) コンピュータ不安[16]

#### G) 脆弱なナルシズム[17]

コンピュータ不安や脆弱なナルシズムは、3.3での事例分析においては高くはない評価となったものの、尊大なナルシズムを取り扱った先行研究において、尊大なナルシズムと互いに影響を与え合う共変数として採用されていたため、これら2要因も項目に加えることとした。

#### H) 犯罪被害リスク認知[18][19]

犯罪被害リスク認知も3.3での事例評価においては高くはない評価となったものの、人気希求や自己表出性などの高評価な要因に影響を与えている可能性があるため、採用した。

#### I) 情報セキュリティ疲れ[20]

情報セキュリティ疲れとは、「対策が必要となる原因であるサイバー犯罪やヒューマンエラーによるインシデントへ対応の多様化により、その情報セキュリティ対策施策の種類が増え、内容は複雑化していることでICT利用者が疲弊すること」とされている。FurnellとTompsonにより2009年に提唱された概念である。本項目は、3.2で検討した要因である、プロフィール文やアイコン画像、言葉遣いの使いまわしを生じさせている心的要因として仮定した。プロフィール文やアイコン画像、言葉遣いの使いまわしは3.3での事例分析においては高くはない評価となったものの、自己情報を公開する範囲の次に高評価の属性・状況要因であることも考慮して、採用した。

#### J) コミュニケーション・スキル[21]

SNSを利用するうえで他者とのコミュニケーションが発生しうる可能性が高く、コミュニケーション能力が意図しない個人特定の経験の有無に関係すると予想し、採用した。

ただし、上述した引用文献で示された質問項目を全て採用した場合、回答者にとっての負担が大きすぎると考え、この負担の低減を目的として、質問項目を選定した。

さらに、不良な回答データを排除するために回答がほぼ、真逆になるはずの2つの質問3ペアを建前尺度として含めた。この結果において同一の選択肢を大量に選択する、明らかに不整合である回答は除外することとした。

また、心的要因に関する質問項目はBig Five Personalityに合わせて、全て7件法(1:非常にあてはまらない, 2:あまりあてはまらない, 3:どちらかといえばあてはまらない, 4:どちらともいえない, 1:どちらかといえばあてはまる, 1:わりとあてはまる, 1:非常にあてはまる)で回答させた。

続いて、属性・状況要因及び個人特定経験に関する質問項目では、性別や現在の職業、SNSへの投稿頻度、SNSに投稿した内容をどれくらい不特定多数に公開しているか、意図しない個人特定の経験の有無について尋ねた。

現在の職業については、社会人経験の有無が個人特定の経験の有無や心的要因に関する結果に差を生む可能性を考え、比較をするために尋ねた。

SNSに投稿した内容をどれくらい不特定多数に公開しているかについては、3.3で特に着目するとした、自己情報を公開する範囲についての結果を得るために尋ねた。

### 4.3 結果

因子分析の結果を表3に示す。分析の結果、本研究では10因子を採用した。また、各因子について次のように解釈した。

因子1: 犯罪被害リスク認知の7項目によって構成されており、犯罪被害リスク認知に関する因子と判断され、「犯罪被害リスク認知因子」と命名した。

因子2: コミュニケーション特性の6項目とBig Fiveの協調性の1項目によって構成されていることから、他者との交流に関連していると判断し、「コミュニケーション能力因子」と命名した。

因子3: 尊大なナルシズムの2項目と人気希求の1項目によって構成されていることから、他者からの称賛への期待に関連していると判断し、「尊大なナルシズム因子」と命名した。

因子4: 自己表出性の2項目と人気希求の2項目、尊大なナルシズムの1項目、自尊心の1項目によって構成されていることから、自信をもって自身のことを宣伝し、人気を得たいという考えに関連していると判断し、「自己顕示欲因子」と命名した。

因子5: Big Five Personalityの神経症傾向の1項目と脆弱なナルシズムの1項目によって構成されていることから、神経質な特徴に関連していると判断し、「神経症傾向因子」と命名した。

因子6: Big Five Personalityの外向性の1項目とBig Fiveの神経症傾向の1項目、Big Five Personalityの開放性の1項目によって構成されていることから、大人しさを冷静さ、謙虚さに関連していると判断し、「精神的安定因子」

表3 因子分析結果のパターン行列

設問内容	因子									
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8	因子9	因子10
SNSのアカウントがのっつられて勝手に書き込まれることがあるかもしれないと思う	.910	-.082	-.048	-.158	-.076	-.021	.021	.051	-.028	.068
自分のパソコンやスマートフォンが誰かにのっつられて使えなくなることがあるかもしれないと思う	.809	.043	-.052	.030	-.090	.020	-.028	.058	-.092	.005
自分のSNSアカウントが荒らしにあることがあるかもしれないと思う	.806	-.063	-.020	-.025	.049	-.054	.009	.083	.010	.137
SNSの情報を使って現実世界で嫌がらせをされたりストーカーにあたりることがあるかもしれないと思う	.730	.107	.004	.093	.010	-.080	-.108	-.086	-.021	-.117
他人に知られたくないことをオンライン上でばらされる可能性があるかもしれないと思う	.701	-.078	-.026	.004	.069	-.075	.038	.007	.168	.053
自分が利用しているオンラインサービスのポイントが盗まれたり、オンライン決済で自分のお金が使われたりすることがあるかもしれないと思う	.662	.122	.102	-.080	.129	.014	.052	-.082	.010	-.095
自分のSNSアカウントが炎上することがあるかもしれないと思う	.463	-.110	-.104	.362	-.004	.029	.024	.078	.105	.067
相手の伝えたい考えや気持ちを正しく読み取るのが得意だと思う	-.033	.925	-.028	.006	.131	-.065	.041	.034	.077	-.261
相手を尊重して相手の意見や立場を理解するのが得意だと思う	.066	.843	-.005	-.141	.294	.050	.015	-.036	.051	.019
周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整するのが得意だと思う	-.045	.679	-.019	-.007	.032	-.116	-.015	.032	.012	.050
自分の感情や行動をうまくコントロールするのが得意だと思う	.089	.521	.063	-.047	-.367	.190	-.169	.044	.119	.036
自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張するのが得意だと思う	-.078	.441	.173	.119	-.088	-.135	.017	.123	.085	.079
他人に不満をもち、もめごとを起こしやすいと思う	-.034	-.427	.103	.364	.226	-.007	.195	.060	.165	.014
自分の考えや気持ちをうまく表現するのが得意だと思う	.040	.352	.131	.109	-.204	-.196	.169	.097	.238	-.068
注目的になりたいと思う	.018	-.025	.939	-.291	.062	-.052	-.091	.005	-.043	.253
人気を得るために普段はしないようなことをすることがある	-.117	.031	.592	.157	.020	.043	.089	-.001	-.101	-.051
人々に命令することが好きだ	.036	-.063	.552	.238	.030	-.089	-.101	-.072	.038	-.020
SNSで公開している自身のプロフィールの内容には自分の意見や感情が含まれていると思う	-.085	-.055	-.080	.587	-.041	.017	-.147	.027	.196	-.004
SNSで公開している自身のプロフィールの内容は詳しいと思う	-.020	-.104	.048	.583	-.100	.163	.053	-.007	.076	-.080
その人が人気者だからという理由で、仲良くしている人がいる	.220	.061	.092	.464	-.028	.085	.049	-.072	-.255	-.078
全体的に、自分自身に満足している	-.080	.134	-.142	.389	-.182	-.017	-.016	-.059	.123	.168
人間関係を保つことを目的に物を買ったり服装を変えたりすることがある	.211	.111	.054	.384	.071	.112	-.056	-.083	-.245	-.075
誰もが私の話を聞くのが好きだと思う	-.089	.082	.248	.303	-.160	.027	.111	.019	-.101	.188
心配性で、うろたえやすいと思う	.059	.015	.117	-.079	.710	.223	.065	.028	.127	.045
他人の嘲笑や侮蔑的な発言によって傷つきやすいと思う	.029	.226	-.021	-.043	.693	-.057	-.100	.071	.030	.008
ひかえめでおとなしいと思う	-.111	.019	-.040	.230	.055	.901	-.025	.021	.023	.029
冷静で気分が安定していると思う	-.025	.254	-.050	-.122	-.263	.405	.171	.007	.009	.091
発想力に欠けた、平凡な人間だと思う	.024	-.081	-.053	-.054	.192	.301	.110	.017	.100	-.154
しっかりしていて自分に厳しいと思う	-.031	-.050	-.042	-.001	.061	.086	.723	.103	-.028	.090
だらしなくうっかりしていると思う	.017	-.082	.085	.114	.130	.170	-.521	.163	.083	.157
自身の興味に没頭しやすく、他人の存在を忘れてしまうことがある	-.134	-.002	-.072	.338	.190	-.079	-.359	.112	-.074	.121
インターネットやSNSを安全に使えるように気をつかうことを、面倒に感じることがある	.003	-.006	-.068	-.025	.085	-.018	-.056	.820	-.103	-.019
インターネットやSNSを安全に使えるように気をつかうことを、もうやめたいと思うことがある	.047	.145	.073	.084	.073	.126	.096	.479	-.111	-.125
PCやスマホに問題が起こっても、自分で解決することができる	.078	.123	-.054	.266	.133	-.030	.022	-.103	.637	.048
PCやスマホでの作業に特にストレスを感じない	-.004	.131	-.056	.028	.023	.129	-.100	-.058	.513	.089
インターネットやSNSを安全に使えるように色々と頑張ったり時間をかけたりにしていると思う	.188	-.011	.133	.179	.038	.120	-.051	-.128	.214	.144
新しいことが好きで、変わった考えをもつと思う	.044	-.102	.169	-.050	.017	.025	-.066	-.024	.112	.521
活発で、外向的だと思う	.053	.030	-.029	-.020	-.136	-.354	.174	-.021	-.035	.471
人に気をつかうやさしい人間だと思う	-.067	.438	-.118	-.141	.293	.094	.080	-.102	-.058	.441

と命名した。

因子7: Big Five Personality の誠実性の2項目と脆弱なナルシズムの1項目によって構成されていることから、誠実さと他者への気配りに関連していると判断し、「誠実性因子」と命名した。

因子8: 情報セキュリティ疲れの2項目によって構成されていることから、「情報セキュリティ疲れ因子」と命名した。

因子9: コンピュータ不安の2項目と情報セキュリティ疲れの1項目によって構成されていることから、ITに対する不安感に関連していると判断し、「コンピュータ不安因子」と命名した。

因子10: Big Five Personality の開放性の1項目と Big Five Personality の外向性の1項目, Big Five Personality の協調性の1項目によって構成されていることから、他者に向ける意識に関連していると判断し、「他者への関心因子」と命名した。

本研究では、特に注目するとした心的要因である、との関連性が高い因子に焦点を当てることとした。その結果、尊大なナルシズムとの関連性が高い尊大なナルシズム因子と人気希求、自尊心、自己表出性との関連性が高い自己顕示欲因子が該当した。

はじめに、個人特定の経験の有無と各因子との関連性について示す。ここでは、因子3と因子4の因子得点の平均値を、意図しない個人特定の経験の有無ごとに算出した。図1に結果を示す。

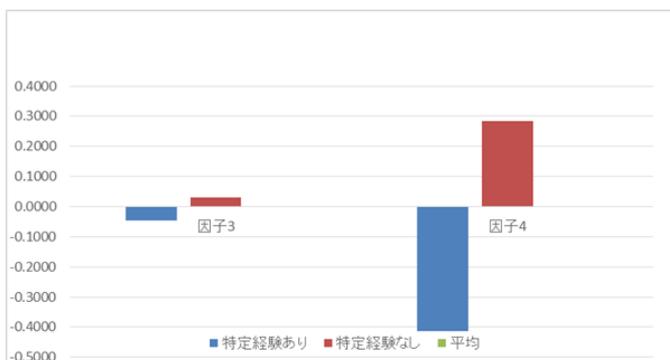


図1 因子3と因子4の因子得点の平均値  
 (個人特定の経験の有無)

因子3の尊大なナルシズム因子については、特定経験があると負の、特定経験がないと正の方向に影響を受けている。ただし、その違いはわずかであった。因子4の自己顕示欲因子については、特定経験があると負の、特定経験がないと正の方向に影響を受けている。また、自己顕示欲因子は尊大なナルシズム因子よりも影響の値が大きい。回答者全体の因子得点はいずれの因子においても、グループ分けしたものと比較して0に近い値をとっている。

ここで、自己顕示欲因子に焦点を当てて、社会人経験の有無と性別ごとの因子4の因子得点の平均を求め、図2と図3に示す。



図2 因子4の因子得点の平均値(社会人経験の有無)

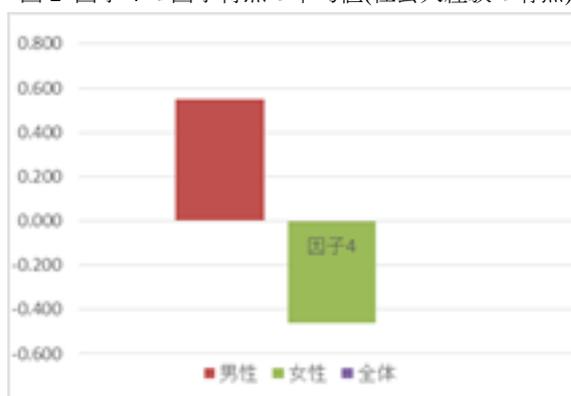


図3 因子4の因子得点の平均値(社会人経験の有無)

社会人の有無で比較すると学生が、性別で比較すると女性が因子4の自己顕示欲因子の因子得点の平均が負の値をとっている。

続いて、自己情報公開の範囲と意図しない個人特定経験の有無との関係性を示す。質問項目の「あなたの投稿したものとタイムラインを誰もがみられるようにしていますか。」に対する回答を個人特定経験の有無ごとに集計した。なお、SNSでの投稿を行わないために回答が空欄となっていたものは「全てのSNSで非公開」の扱いとした。図4に回答者の人数とその割合を示した。

個人特定経験の有無に関わらず、「全てのSNSで非公開」が5割弱で「一部のSNSで公開」が4割弱、「全てのSNSで公開」が1~2割の割合となっている。

#### 4.4 考察

意図しない個人特定に影響を及ぼす要因について考察する。

特に注目した要因の1つである尊大なナルシズムを含んでいる尊大なナルシズム因子と意図しない個人特定の経験との関連性は低いことが明らかとなった。これは、尊大なナルシズムによって自己情報公開をしやすい傾向にあ

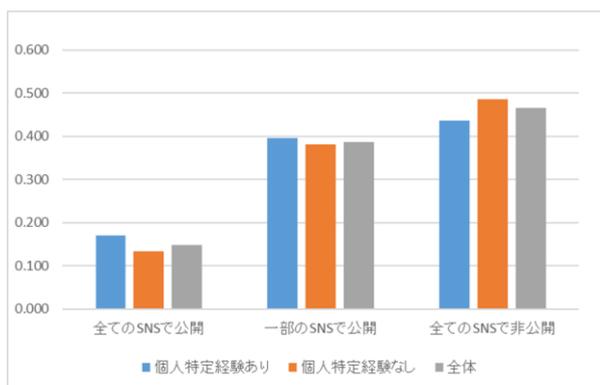


図4 個人特定経験の有無別の SNS の公開状況の割合

ったとしても、その他の要因の影響によって個人特定に至っていない可能性が推測される。

特に注目した要因の1つである自己表出性、自尊心、人気希求を含んでいる自己顕示欲因子と、意図しない個人特定の経験との関連性は高いことが明らかとなった。特に、学生と女性が因子を強く持っていることが明らかとなった。このことより、学生女性の意図しない個人特定は自己顕示欲因子によって助長されている可能性が推測される。

さらに、注目した要因の1つである、自己情報を公開する範囲と意図しない個人特定の経験との関係については明確な傾向が確認されなかった。意図しない個人特定の経験の有無に関わらず、全ての SNS を公開状態にしているユーザは1割~2割であり、自己情報公開に対して無関心なユーザは多くはないことが読み取れる。意図しない個人特定の経験があるユーザにおいても、全ての SNS を公開状態にしているユーザが少なかった理由として、特定行為の被害に遭ったことで、自己情報を公開する範囲を限定的に設定した可能性が推測される。

## 5. 今後の課題

今回取り上げた2因子以外の8因子と個人特定経験との関連性を調べ、個人特定の助長に強く影響している因子を明らかにする必要がある。また、各因子を構成している要因間での相互作用についても調査する。

## 参考文献

[1]総務省 平成29年版情報通信白書  
 (<http://www.soumu.go.jp/jouhoutsusintokei/whitepaper/ja/h29.html>.)

[2]青山征彦, 大学生における SNS 利用の実態—使い分けを中心に—, 社会イノベーション研究 第13巻 第1号 pp.1-18, 2018

[3]総務省 インターネットトラブル事例集(平成29年度版)  
 ([http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000506392.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000506392.pdf))

[4]佐藤広英, 太幡直也, 情報プライバシーの測定—プライバシー次元尺度(MPS)の作成—パーソナリティ研究, 第23巻, 第1号, pp.171-179, 2015

[5]太幡直也, 佐藤広英, SNS 上での自己情報公開を規定する

心理的要因, パーソナリティ研究, 第25巻, 第1号, pp.26-34, 2016

[6]Hongmin Ahn, Elizabeth A. Kwolek and Nicholas D. Bowman, Two faces of narcissism on SNS: The distinct effects of vulnerable and grandiose narcissism on SNS privacy control, Computers in Human Behavior Vol.45 pp.375-381, 2015

[7]吉國綺乃, 渡辺知恵美, 小林一郎, SNS の投稿内容に含まれる興味に着目したアカウント到達可能性算出モデルの検討, ARG WI2 No.5, 2014

[8]アライドアーキテクツ株式会社 Facebook, Twitter から新興 SNS まで「SNS」の利用実態を調査  
 (<https://www.aainc.co.jp/news-release/2018/01632.html>) (2015/03/05 更新 2020/01/20 参照)

[9]株式会社 電通 電通総研「若者まるわかり調査2015」を実施—「ウラハラ・マインド」を持つ、今の若者像が明らかに—

[10]荻上チキ, ウェブ炎—ネット群衆の暴走と可能性, ちくま新書, 2007

[11]小林直樹, ソーシャルメディア炎上事件簿, 日経BP社, 2011

[12]小塩真司, 阿部晋吾, カトローニ ピノ 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み 2012年 パーソナリティ研究 第21巻 第1号 pp.40-52

[13]Darcy A. Santor, Deanna Messervey, and Vivek Kusumakar Measuring Peer Pressure, Popularity, and Conformity in Adolescent Boys and Girls: Predicting School Performance, Sexual Attitudes, and Substance Abuse 2000年 Journal of Youth and Adolescence Vol. 29 No. 2

[14]Daniel R. Ames, Paul Rose, Cameron P. Anderson The NPI-16 as a short measure of narcissism 2006年 Journal of Research in Personality Volume 40 Issue 4 pp.440-450

[15]Rosenberg, M. Society and the adolescent self-image. 1965年 Princeton, New Jersey: Princeton University Press

[16]David Lester, Bijou Yang, Simon James A short computer anxiety scale 2005年 Perceptual and Motor Skills Volume 100 Issue 3 pp.964-968

[17]Holly M. Hendin and Jonathan M. Cheek Assessing Hypersensitive Narcissism: A Reexamination of Murray's Narcissism Scale 1997年 Journal of Research in Personality Vol.31 pp.588-599

[18]中谷内一也, 島田貴仁 犯罪リスク認知に関する一般人—専門家間比較: 学生と警察官の犯罪発生頻度評価 2008年 社会心理学研究 第24巻 第1号 pp.34-44

[19]山本太郎, 千葉直子, 植田広樹, 高橋克巳, 平田真一, 小笠原盛浩, 関谷直也, 中村功, 橋元良明 インターネットにおける不安からみた安心の模索 2011年 第100巻 第123号 pp.41-47

[20]畑島隆, 谷本茂明, 金井敦 情報セキュリティ疲労度測定尺度の提案(大学生版)—バーンアウト尺度の援用による測定手法の設計と評価— 2018年 電子情報通信学会論文誌 D Vol. J101-D No.10 pp.1414-1426

[21]藤本学, 大坊郁夫 コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み 2007年 パーソナリティ研究 第15巻 第3号 pp.347-361